

明治期の旧制中学における運動会の研究 (4)

—愛知県第一中学校の事例から・その2—

秦 真人

愛知学泉短期大学

A study of Athletic meets in old system Junior High School during the Meiji era (4)

—the Athletic meets of Aich 1st Junior High School (2)—

Mahito Hata

キーワード：運動会 Athletic meets、旧制中学校 old system Junior High School、明治時代 Meiji era

1. はじめに

今日、国民体育大会を筆頭に日本で開催されている数々の総合スポーツ大会は、近代学校教育の中で実施されていた運動会がその歴史的基盤となっているといっても過言ではない。

本研究では、このような考えのもとに愛知県で行われた運動会の初期の実態を究明するため、明治期の旧制中学の活動に焦点を絞り、明治期に実施された運動会の模様を残存する史料の検討からその一端を明らかにしていこうとする一連のものである。

筆者はこれまでに、愛知県第三中学校(現、愛知県立津島高校)、明倫中学校(現、愛知県立明和高校)、愛知県第一中学校(現、愛知県立旭丘高等学校、以下「愛知一中」)の日露戦争までの事例を見てきた。前回は明治26年から明治37年にかけての愛知一中において開催された運動会の事例を検証し、その種目数、内容とも年々と激しく変化していく時期であったことが史料からうかがわれた。愛知一中は1877(明治10)年に愛知県中学校として設立し、愛知一中と呼ばれるようになるのは1896(明治29)年に愛知県第一尋常中学校と改称された頃からであろう。そのため愛知一中は県下のみならず、全国的にも早くから校友会(愛知一中では「学友会」と呼称)活動が行われた中学の一つであり、従って愛知県の中でも早くから運動会が定着していく土壌があったと考えられた。また、運動会開催の背景や愛知一中独自の特徴を見

ることもできた。例えば、運動に関わる校内行事において、いかに多くの運動の機会を生徒に与えようとしていたかということ。また校内にとどまらず、県下の諸学校の生徒を招待したり、諸学校へ馳せ参じて行き近隣の諸学校間の交流も進めていった様子が見えてきた。そしてこのことは、明倫中学の場合と同様に日比野校長の影響が大であったことなどの特徴を明らかにしてきた¹⁾。今回は愛知一中の事例の中で残された明治38年から明治末期の期間を、校友会雑誌「学林」の分析から進めていく。

2. 明治末期における愛知一中の運動会

愛知一中の記録の中には、明倫中学のように各年度ごとの詳細な運動会記録が残されていない。そのため今回の分析は、後年(明治43年)にまとめられた運動会記録を中心に、明治38年以降の状況を、その時々の特徴的なものを取り上げながら見ていくことにする。

(1) 明治38年度

この年も前年同様に4回の校内運動会が举行されている。

1) 春期(季)大運動会 4月23日

記録によると「年々歳々我陸上運動会の隆盛に趣くは、競技の回数の会毎に増加するを見ても知る得べし」²⁾と実に140回以上の競技番組が行われて

いたようである。他に「自転車の曲乗の余興等もあり、其の如何に盛大なりしかは察するに難からず」³⁾とある。また、師団長、事務官、裁判所判事、各幼年学校長等の諸名士が多数来観した様子が記されている。

2) 春期(季)小運動会 5月18日

この時は、各組選手の徒競走を挙行政したのみであったとだけ記されている。

3) 一中明倫連合運動会 6月9日

前年に引き続き、二校の連合運動会を一中の校庭で催された。しかしながら、前年のこの会において一中の一生徒が障害物競走の後、心臓マヒを起こして死亡するという事故が起き、中断して散会したこともあってか、規模はごく小さく、混合決選徒競走として行われた。また、恒例になった他校の運動会への参加は、明倫(4/30)、浜松中学(5/14)、県立工業(5/20)、三重県立第二中学(5/20)に参加して好成績をあげている。

4) 秋季陸上大運動会 10月8日

この年の9月5日、ポーツマス条約の締結により日露戦争は終結した。その直後に行われたこの会は「極めて盛大に行われたり。時恰も日露干戈を収めて両国平和の局を結びたれども上下戦後帝国の経営に忙がはしく、第二国民たる吾人学生が、心身の修養又忽にすべからざるを以て、頻りに運動部の振興を鼓吹して、其の実を挙げんと努めたるなりき。去れば健児又自ら奮起して鋭意運動を重んじ、ここに運動会の好機に会し手練の程を示すは此時と、青年の鋭気期せずして表はれ、勇壯の競技は観る者をして血湧き肉躍るの感を懐かしめぬ」⁴⁾と戦後の鋭気が伝わる内容で記されている。

回数は122回、種類は二百、四百、六百、八百ヤード、二人三脚、クラス、障害物、武装競走、千鳥等であった。来校選手には蟹江高等小学校、明倫、第二師範の生徒があり、当日の来賓として県知事、税務監督局長、高等工業学校長、海軍中佐等などが臨校した。また、特筆すべきは、日露戦役によって捕虜となっていたロシア将校士卒等も来観したとのことである。

5) 東京遠征

この年から、校内の運動会、近隣の諸学校の運動会参加にとどまらず、優秀な生徒を東京高等師範学校(現、筑波大学、以下「東京高師」)の運動会に参加させている。「我校選手が近県各学校にて毎時偉功を

奏せし事は前記の如くなるが、我健児の横溢せる覇気は此等近県の敵のみに満足せず、はるばる東都に遠征を試むるの壮挙を企つるに至れり。十一月五日我好選手松本一郎、稲生稔、渡邊静一郎三名は、八百の健児を代表するの重任を負ひて東京高等師範学校運動場会に出場せり。其結果未だ都人を驚かすに至らざりしと雖も、愛知一中の運動部が如何に盛んなるかを、遠く江戸童の脳裡に印せしや明なり」⁵⁾と好成績には至らなかったが愛知一中は運動が大きい盛んであること印象づけてきた様子を伝えている。

また他校への参加は農林(10/11)、明倫(10/15)、医学専門(10/20)、三中、四中(11/3)、二中(11/5)、第二師範(11/12)に参加して戦績を残している。

(2) 明治39年度

1) 春季大運動会 4月29日

この運動会では141回の競技番組が行われていたと記録されている。「運動の活発勇壯なりしは言を待たず。稲生稔(一分四十三秒)優勝旗を得。高小選手に於て第二高小、諸学校に於て明倫(二百)第二師範(八百)何れも月桂冠を得たり。(中略)此会東京日々新聞社及時事新報社より賞牌の寄贈あり」⁶⁾と記されている。これは一中の稲生氏がタイムからみて一番メイン競技である八百ヤード競走で一等を獲ったこと、招待校の中の優秀校への表彰、各新聞社が賞牌を寄贈してくれたということが記録されているのである。この稲生氏は明倫(5/6)、三重県二中(5/15)、四日市商業(5/19)、浜松中学(5/20)の各春季運動会にも出場し何れも八百ヤード競走で一等を獲ったことも記されており、「到る処に優勝の名誉を荷ひたりしが、中にも稲生の如きは殊に卓越して、第一等の其名博せざること殆んどなかりき、本校の壮名愈々赫たり」⁷⁾と讃えられている。

2) 秋季陸上大運動会 10月14日

明治38年秋期運動会以来「競技の種類は殆んど規定せられたるが如く、彼の敏活なる男子的競技は愈々其の独特なる一中運動会風をして超然として異彩を放たしむるに至れり。爾後毎回此の一定の規則に従ひて大なる変化を見ず」⁸⁾と運動会形式がほぼ固定化したことがうかがえる。

この会の回数は129回であったが、その固定化した様子を次のように伝えている。「会場は本校西運動場にして、入口には緑門を飾り場内には万国旗紅燈

を縦横に張り、来賓席、招待選手席等には幕を纏う繞らせたり。楽隊の囀鳴たる音に和して発砲を合図に駆け出づる健児は、能ふ限りの軽装に五色の運動帽を被りて、勢猛き有様は雄々しとも雄々し。競技は午前七時頃に始まりて午後三時頃に終り、二、四、六、八百ヤード、クラス、障害物、武装、千鳥等の競走をなす。他に来賓、職員の競走及綱引等あり。此の間に高等小学校選手の予選、決選競走並に諸学校の二百、八百ヤード競走を行ひ。最後に本校選手の優勝旗競走をなすを例とせり。来賓及一般観覧人は毎に場内に溢るゝの盛況を呈するなり」⁹⁾とその様子を伝え、これを以て以降の年度の状況を省略することになっている。

また他校への参加は曹洞第三中学林 (10/5)、農林 (10/11)、明倫 (10/13)、二中 (10/21)、医学専門 (10/26)、三中 (10/28)、第二師範 (11/12) 等に参加して「一中選手に向ふ所敵なきの隆盛を到せり」¹⁰⁾と記されている。前述の稲生氏は「当時国内の耳目を聚めたる東京高等師範学校秋季大運動会」(10/27) に於いて、六百ヤード競走に出場し三位になるほか、農林、明倫、二中の各運動会の八百ヤード競走で優賞し、稀なる好成績を残した。この年からの特徴としては、これまで続けられていた春季の小運動会と明倫との連合運動会が開催されず、校内運動会が春秋の二回に絞られたことである。特に明倫中との連合運動会が行われなくなった理由は、日比野校長の明倫での任期が、この年に終了したためではないかと推察される。

(3) 明治 40 年度

1) 春季大運動会 5 月 5 日

この運動会では「競技総数百三十番、月桂冠をしめたるは熱田高小、明倫(短)、二中(長)の健児なり。本校の勝利は水野^(英力) 茂 一(一分二十五秒)」¹¹⁾としか記録が残されていない。あとは「稲生(医にて八百一等)、鈴木(医にて八百三等、四日市にて一等)、安田(高工にて三百一等)、水野(四日市にて八百二等)、石井靖彦(高工にて三百二等)、高工(四月二十八日)、医学専門(三月十七日)、四日市商業(五月二十一日)の春季運動会に派出せられ、皆一二等の首席を占めたり」¹²⁾と他校での戦績が記されている。

2) 秋季陸上大運動会 11 月 10 日

この運動会についても「回数百三十、其盛大言語

に絶す、水野英一再び優勝旗を得。西春日井東部高小、明倫(短)、二中(長)は戦勝の万歳を大呼せり」¹³⁾とだけ記されている。

その他にはこの年の秋の東京高師での運動会の様子を「思ふに我校運動部の隆盛は日を迫ひて愈々著しく、今や校内斯道の剛者は枚挙に遑あらず。百花咲き乱れたるの感あり、見るべし其諸校に金城健児の光を輝かせしを。水野英一、古橋猶三郎の両選手は、東京高師に出場して十三校の選手の間に入り、ともによく奮闘して十優勝者の選に加はり、最後の優勝旗競走には古橋第三着の誉れを得たり」¹⁴⁾と記されている。

他校への参加は農林 (10/11)、医学専門 (10/15)、四中、工業(10/17)、明倫 (10/21)、二中 (10/27)、三中 (11/3)、曹洞第三中学林 (11/6)「等の諸学校に臨みては気既に敵を呑みて相敵するもの無く、桂冠は毎に我の独占する処たりき」¹⁵⁾と記した後に水野氏、古橋氏を中心とした各選手の戦績が記されている。この頃から、校内運動会の様子よりも、校外での一中生徒の活躍の方に興味の比重がより傾いていったようにうかがわれる。

(4) 明治 41 年度

1) 春季大運動会 5 月 3 日

この運動会でも「百五十回の大運動会は壮快に行はれて円満なる局を結び得たりき、当日の主なる来賓は黒沢旅団長、木槻郵便局長、柴田工業学校長、前田医学博士、各学校長、新聞記者等二百余名なりき。優勝の名誉を得たる学校は、津島高小、曹洞(短)三中(長)の三者なりき。又本校にて優勝旗を握りしは高木軍次郎なり」¹⁶⁾とだけ記されている。

その代わり「本県及近県諸学校に出技せし我競走選手の活動は目覚ましきものにて、浜松(五月五日)、明倫(六月十四日)の両中学、医学専門(五月二十七日)、四日市商業(同二十三日)等到着大勝を占めたり」¹⁷⁾とあり、古橋氏の活躍を中心に各選手の戦績が記されている。そして「我運動部のかくも隆盛に趣きたるは元より故あり、特に日比野校長が終始不斷の指導奨励に尽力せられて、夏の砂やく暑き日も、冬の凍れる寒き日も、校外北練兵場の広野に我選手は日々競走練習を励むべしとの訓諭あり、我選手乃ち奮つて起ち、進んで熱心に其を実行し来れるなり。赫々たる名声を得るに至れるも、豈一朝一夕

の業ならんや」¹⁸⁾と記されている。この日比野校長については、後で少し触れておきたい。

2) 春季小運動会 2月8日

年度としては明治40年度であるが、春季小運動会として51回の競技がなされた。種類は二百、四百、八百、千ヤード及クラスリレーの五種目であった。また続いて4月11日にも第2回の春季小運動会が2月と同様の競技にて開催されたようである。

3) 秋季陸上大運動会 11月15日

この運動会は「優勝旗披露を兼ね、名も香はしき二葉の新運動場に開会せり。校舎未だ成らず、グラウンド未だ堅固ならずと雖も、職員及幹事の奔走によりてコースは清められたり、観覧席は設けられたり、殊に旧校に倍するの大運動場、清鮮の気場に満ちて其の快云ふ可らず。グラウンドの広大は為めに新式のコースを用ふるを得たり。即ち長方形の四隅を拋物線を以て円めたるものなり、是れ走者の実力を試す利甚だ大なるを以てなり」¹⁹⁾と校舎移転に伴い、新運動場での新たな展開の様を伝えている。

そして「当日吾が競走史上忘る可らざる快事あり、他なし優勝旗の披露之れなり。場の中央翻々として翻へりしは之れなん我が校選手古橋が第一高等学校、東京高等師範学校、京都大学に於て得たる大優勝旗なる。加ふるに愛知医学校にて得たる優勝旗及野毬端艇にて得たるもの各一旒、燦然として風に靡ける様は、我校の空前の榮譽を讃美せるが如し。場に満てる数百の紳士識者の視線は一斉に三大優勝旗に注がれたり、斯くて競技総数数百六十余回空前の盛会なりき。当日市内紳士、新聞社、卒業生諸氏より寄贈品の山如かりき」²⁰⁾と東京高師以外に一高、京都帝国大学という上位校にも遠征し、しかも顕著な好成績を得たという快挙が讃えられている。

また「抑も本校競走部の活動力は校風の向上と共に年々長足の発達を来し、本年度の如き空前の良績を表はし、一高、高師、京帝大に一等の栄冠を納めしは前述の如し。関西関東攻めて勝たざるはし、近県諸校為めに顔色なし。實に是れ我校競走熱の高潮時にして、優に我が校競走史のレコードを破りたるものと謂ふべし。然りと雖も我校此の小成を以て安ずるものに非ず、堅忍宏闊沈毅肅静は由来本校生の本領なり、此度に於て競走熱勃然として起り以後益々向上発展の機運に向はんとせり。斯くて其の具体的に現はれ来りしを各年級を通じて毎週行はらるに至りし競走の練習となす。即ち本校の外郭を三回

周るなり、選手は別に特別練習を行へり」²¹⁾と、愛知一中の競走熱に対する背景的要因にも触れている。

4) 大阪毎日新聞社マラソン競走

この年度の3月に、大阪毎日新聞社主催の神戸大阪間20マイル(31,7 km)の競走が催され、愛知一中の選手も参加した。この大会は日本初の「マラソン競走」といわれ、神戸湊公園から大阪西成大橋までの間を、予選を勝ち抜いた選手たちによって争われたものである。その模様を記した部分を見てみる。「予て関の東西に名をなせる我校いかでか此の空前の壮挙に黙止するを得べき、乃ち宮本成瀬の両先生及古橋猶三郎、林鎌二郎、飯田又三郎の三名を派遣せり。此の挙に申込合格者実に百三十一名と註せらる、孰れも一県若しくは地方を代表せる団体公認選手にして、学生、銀行員、会社員、在郷軍人、警察官を主とす。其の出身区域殆んど日本全国に渡る。十四日鳴尾競馬場にて十哩に渡る予選競走あり、幸にして古橋、林は本競走に入るを得るの榮を得たり」²²⁾と愛知一中の二人が、130名のあまりの予選を勝ち抜き、20名の中に選ばれた。そして3月21日、「二十名の選りに選りたる予選優勝者が最後の實力を試すの日は来れり。十一時三十分神戸市長、兵庫県知事代理諸氏の斡旋に依りて大競走の幕は開けたり。ユニホームに身を固めたる二十の勇士いづれ劣らぬ一騎千当の剛者、其の競走の激烈なる殆んど筆紙に尽すべからず、街道二十哩の肩摩せる群衆が歓呼天地を動かしぬ。スタート附近にて最後にありし我選手は漸次十二、十三位を占め、古橋は幾分弱勢なる林を掩護しつつ相並んで疾走せり。態度整然歩調秩序あり、然も悠揚迫らず堂々として勝を最後に決せんとす、決勝点目睫に迫るや古橋は悲壮なる一語を残して奮然として疾駆し一人を抜く、然れ共大勢既に定まる。第一着(二時十分五十四秒)金子長之助氏を始めとし、古橋九着(二時二十四分十七秒)、林十一着(同五十一秒)たり。嗚呼斯くの如くにして我が選手は破れたり」²³⁾と古橋氏は20名の選手に選ばれたものの本戦では優勝に手が届かず、9位に終わった。しかしながら古橋氏の走る姿は「然れ共其の武士的行為は観者をして坐り暗涙を催さしめぬ、宜なる哉当日競走終了後古橋は銀髪霜の如き土屋老將軍の前に呼ばれ、仁田原審判長より競走中終始一貫せる勇敢礼儀に富める武者振を激賞せられ、特に寺村氏寄贈の名刀一口を賞与せられたり。嗚呼斯くの

如くにして我選手は武士的スピリットを発揮せり。吾人我校競走史上衷心歓喜に堪へざるなり」²⁴⁾と賞賛され、観衆に感動を与えたことが認められて銘刀を授与されたことが記されている。

(5) 明治 42 年度

1) 春季大運動会 5 月 12 日

この会は「一高を始め諸校にて得たる優勝旗愈々光輝を放ちて風に翻れり、殊に古橋のマラソン競走にて得て本校に寄附したる銘刀は厳しく飾られたり、諸学校長、陸軍将前年に譲る校、新聞社代表者諸氏の来臨あり、回を重ねる百五十余回、楽隊の声援あり其の盛なる前年に譲らず、当日中学程度諸学校競走は四百一等曹洞宗中学、八百四中なりき。尚我選手は五月及六月に行われし医専、浜松中学、四日市商業、浜松商業の各校に出馬し皆一等の栄冠を得たり。斯くて競走界は益々発達し進歩せずんば己まざらんとす」²⁵⁾と簡潔に記されている

2) 秋季陸上大運動会 10 月 10 日

この会も「例年の如く、盛大なる運動会を挙行す。多年來養ひ来れる一中式運動振、愈々其の特色を発揮す。回を重ねる事百五十一回、別に番外二十二回あり、然れども、朝来天気面白からず、午後大雨と変じ、グラウンド競走にたへず、止むを得ず競技を中止し、残部は十六日午後を以て挙行せり」²⁶⁾と悪天候のため、二日に分けて行われた。この会の特筆すべきは「一千及二千ヤード競技の行われたることなり、殊に校長は二千ヤード競走に於て、一等の栄冠を得られたり得意と云うべし」²⁷⁾と校内運動会にも長距離走を行うに至ったことと、日比野校長自らが参加し、然も優勝したということであろう。

その他に恒例となった他の諸学校での運動会参加による活躍の様子が古橋氏を中心に記録が記されている。校名だけ挙げておくと、一高、東京高師、京都帝大、県立農業、曹洞宗第三中、県立三中、県立第二師範、私立東海中の運動会である。そしてそのほとんどで古橋氏は優勝し、知多郡マラソン五哩競走でも古橋氏は優勝している。

以上、残された史料の関係で、この後の 43、44 年度については見るができなかった。しかしながら、この 5 年間の展開過程の中で、いくつかの特徴を見いだすことができる。前の 3 年間の転換期同

様に日露戦争と日比野校長の影響がより一層強く体现しながら、発展を続けた。戦後におけるさらなる体育奨励ということと、対外的な交流がより一層増していくことが見られた。

3. 時代世相と日比野校長

(1) 当時のスポーツ界の状況

明治 20 年代から学校の課外活動を中心に、近代スポーツの対校競技が急激に発展し、いくつかの問題が発生していった。中でも 1890(明治 23)年 4 月には一高対東京高等商業の競漕競技において高商側の敗因を学校当局に帰することによる校長排斥運動が起こり、同年の 5 月の一高対明治学院の野球試合においては一高応援団がいわゆる「インブリー事件」と呼ばれる暴行事件を起こしたことを皮切りに、1905(明治 38)年 10 月には四校対抗庭球試合が審判問題で紛糾中止となったり、1906(明治 39)年 11 月には不祥事勃発を予想して野球の「早慶戦」が中止され、学生スポーツ活動の中の弊害が顕著なまでの社会問題として表面化していった時期であった。

そして明治 30 年代から、学校教育内におけるスポーツのあり方が広く問われていくことになる。たとえば、学生野球界においては「早慶戦」の中止以降、野球害毒論争(明治 44 年)が新聞各紙ならびに関係雑誌等において展開していく。また、この期に至るまでに、野球のみならず他のスポーツ競技においても同様の問題点が表面化されてきており、すでに 1907(明治 40)年 7 月には文部省の全国中学校長会議(7 月 10～15 日)において、「各学校ニ行ハルル競技運動ノ利害及ビ其弊害ヲ防止スル方法如何」²⁸⁾といった文部大臣の諮問審議と報告(以下、「会議報告」と略す)がなされていた。また 1908(明治 41)年 9 月 21 日には文部省全国高等女学校会議において、小松原英太郎文部大臣(任期：明治 41 年 7 月～43 年 9 月)により「運動競技ハ体育上之ヲ奨励スルノ要アリト雖モ運動会等ニ於テ競技ニ専ラナルノ結果単ニ一部ノ学生ヲシテ運動遊戯ニ与ラシメ且往々余興等ニ濫費ヲ為シ又ハ他校トノ競技ニ業課ヲ放擲スルガ如キハ深ク之ヲ戒メラルベク又演奏会学稽会等ニ関シテモ学生ヲシテ懦弱ノ風ニ習ハシメザル様指導セラルベキコト」²⁹⁾といった選手制度の批判的と思われる訓示もおこなわれ、学校間の対校競技の弊害が深刻な段階に達しつつあったことを明示してい

た。

(2) 日比野校長の「スポーツ競技観」

しかしながらこれら報告等を待つまでもなく、日比野はすでに愛知一中のスポーツ運動活動において効果的な実践を遂げてきていた。その実践は、彼が校長就任時に公表した「中学管理私見」に基づくものであり、当時の世間で問われていたような対校競技の弊害問題は、愛知一中においてはほとんど存在しないかのような様相を呈していた。そして、このような愛知一中のスポーツ活動の基本となる日比野の運動競技に対する方針・見解が、最も集約されていると思われるのが、明治 42 年の「運動及運動競技に関する注意」³⁰⁾であろうと思われる。これは「会議報告」後に示されたものであるが、「中学管理私見」の方針を踏襲しつつ、さらに運動競技に関する見解を集約し、目的、練習、品格、用意、紀律、克己、運動衛生の七項目にわたって論じられている。しかも、その内容は日比野独自の見解がみられ、「会議報告」の内容といくつかの点で大きく相違している。

1) 基本的見解

まず「目的」において、
「一、学生の運動は心身を鍛錬して其健全と其發育とを適良ならしめんが為めに之を行ふものなり、

二、この意義に反する運動は固より吾人学生の欲求する所のものにあらざ故に単に運動の為に運動することあるべからず、

三、運動は心身の機能を健全ならしめ身体を強壮にし意力を堅実にし理想を高尚にし情操を優雅にするものなり、

四、運動は忠実、勤勉、細心、胆大、紀律、節義、聰明、仁愛、礼讓、協同、秩序、恭儉等の美德を適切に発達せしむるものにして病羸怯懦愚昧粗暴等の悪徳に侵されざるは運動の真意義なることを会得すべし」³¹⁾と会議報告の「各学校における競技運動の利益」の項よりも具体的に運動の効果を述べながらその目的としている。

そして「博愛、恭儉、謙讓、寛厚、堅忍、快活、機敏等は日本帝国臣民に必要な美德にして吾人学生はこの美德を運動及運動競技によりて修養するものなることを常に念頭に銘せよ」³²⁾、「一刻寸時と雖も閑あらば頭脳の清新を図り運動をなせこれ学生に伴ふ総ての悪癖悪風悪徳を防止する最良手段なることを造次にも顛沛にも忘るゝ勿れ」³³⁾というよう

に、彼の『日本臣道論』にもとづく臣民の育成のため、あるいは学生の悪徳・情欲を昇華させるための一手段としての運動観を基本としていた。

2) 「会議報告」との相違点

さて会議報告との相違点としてみた特徴は、「賞品其物を目的として競技を為すべからず賞品はこれ優勝者を表彰する略符たるに止まることを記せよ」³⁴⁾としているものの、「運動奨励の一方法として優技者に褒状を与へて之を旌表するの制を設けんと欲す」³⁵⁾と校長就任時に公表して以来、懸賞、賞品制度は校内外において効果的に展開していたことから、懸賞、賞品制度については、あくまでも肯定的にとらえていたことがあげられる。それは「運動奨励の方法工夫に就きても、潜心工夫する所あるべき也。彼の運動競技に於て優勝旗を優勝者に授与するが如きは、事小なるに似たりと雖も、また頗る有効なるものたる事を知らざるべからず。抑も、運動の競技は之れを學術の試験に比すべし、競技の優勝を賞するは、學術の優勝を賞するに同じ。優勝旗は固より優勝者の手中に帰すべきもの、勝者の人を賞するに非ずして、勝者の技を表彰する所以たり。(中略)一旗の旌旗、転々常に優勝者の手中に帰す、もって雄心を鼓舞するに適し、以て練達を促進するに適す。」³⁶⁾といった記述や「運動技の錬磨せざるべからざるを述ぶる所以は、(中略)各般の運動が心身に及す効果の偉大なるものあるを切言せんとするの意に外ならず。予が野球、庭球、端艇、競走等各部の為に優勝旗を製して、各年級選手の競技優勝者を表彰するが如き、講武場を經營して武道の修行に資せるが如き、其他、有益と認むる限り、事情の許す限り、或は選手を遣り、或は校員を派し、或は暇日に際し、或は時機を察し、技術を闘し会合を設くるが如き、皆縷述せる趣旨によりて、苟も運動の善用に遺漏なきを期せんとするものなり」³⁷⁾と述べられているところにその具体的な見解がうかがわれる。

また修学旅行を廃止した日比野であったが、野球部の関東遠征を含む運動競技による長期遠征については進んでこれを奨励し、明治 44 年の第 5 回オリンピック大会への日本の初参加に際しては、「欧米諸国に於ては、体育運動の隆盛、真に邦人の意想外なるものあり。国家之を奨励し、社会之に留意し、之に対する施設は、市町村等企画唯及ばざらんを恐るゝ状況にして、個々の各自が、周到熱誠なる注意を之に払ふは、邦人の動もすれば、運動を児戯視し、

若くは危険視して、軽侮忌避せんとすると、日を同じうして語るべき所に非ず。嗚呼、退嬰姑息は、宿昔の頑夢のみ」³⁸⁾と日本における体育運動に対する見識の狭さを指摘しながら、「大に出場せよ」と鼓舞することによって、競技遠征に参加することの意義と価値を説いていることである。

これらは会議報告の「右弊害を防止する方法」の
(ホ) 競技の為め外泊を許さざること

(ト) 慰労会を催し又金銭物品を寄贈する等を禁ずること

(ク) 平時より他校と競技するために特別に選手を定め置かざること

(ケ) 優勝旗其他勝負の記念となるべきものを廃すること

という項とは明らかに相違している。

また「学生は運動専門家にあらず故に運動の為に学業を怠り学生道を離るゝことあるべからず」³⁹⁾、「運動及運動競技熱に犯されて学生道を逸する勿れ」⁴⁰⁾と記されている見解と同様に、会議報告の「右弊害を防止する方法」の

(ハ) 学力操行共に中等以上の生徒に非ざれば対外競技の選手とせざること

(ニ) 競技は必ず課業を休止せざるの範囲に於て之を行はしむること

(フ) 平素運動時間を制限すること

の項などはすでにその当時一中では、効果的に実践されていた。また、

(リ) 校医をして選手となるべきものゝ身体検査を為さしむること

の項に関しても「第七の運動衛生」と関連しながら毎年身体検査がすでに行われ文武両道が実践されていることを示している⁴¹⁾。

それらは、あくまでも運動競技のみに専念するのではなく、「並行論」を中心として常に学生としての本分を強調しながら学校体育経営をすすめてきた日比野の見解の実践的結果であり、この意味においても実践に裏付けされた日比野の先見的なスポーツ競技観が表れているといえる。

4. おわりに

以上のように、明治 38 年から明治 42 年までの愛知一中において開催された運動会とその他対外的に参加した運動会の結果を見ていくとともに、明治末

期のスポーツ界との関わりからその状況を見てきた。

まず言えることは、愛知一中の例から見ても、この時期に校内運動会においては種目数、種目内容については、ほぼ固定化して春秋を中心とした運動会が地域を巻き込み盛大に催されていたことがうかがわれた。そしてこの時期の顕著な特徴として、競走熱がより一層高まり、稲生、水野、古橋等、突出した選手が輩出され、校内は勿論のこと県内外の諸学校の運動会のみならず、上位校である一高、東京高師、京都帝大の運動会にも各選手が参加して、全国的に活躍していくこと。さらには日本初の「マラソン競走」と言われる大阪毎日新聞主催の 20 マイル競走にも参加して、愛知一中の名声を全国的に広めたことが挙げられよう。これらの対外的な活躍の背景には、日比野校長のスポーツ観と指導が深く関わっていたことが明らかになった。これら一連の展開の中で見いだせることは、校内の運動会からはじまり、徐々に近隣の諸学校との交流へと進み、将来的に大規模な全国的スポーツ大会の開催へ向けての基盤を形成していったと考えられる。時代的にはスポーツにおける理解が欠けている中で、日比野校長は積極的にスポーツの意義を唱え、対外的にも積極的に参加するように促していった。それら先見的な考え方と実践に伴う成果は、歴史的にも大きな意義があったものと言える。

今後は、まだ見ていない愛知県下の別の旧制中学の事例を取上げて、検討を進めていきたいと考える。

引用文献

- 1) 秦真人：明治期の旧制中学における運動会の研究 (3) -愛知県第一中学校の事例から・その 1-，研究論集，第 49 巻，愛知学泉大学，85-93(2014)
- 2) 石田元季：学友会各部沿革史総説，学林，第 69 号，愛知県第一中学校，一誠社，14(1910)
- 3) 同上
- 4) 同上，14-5
- 5) 同上，15
- 6) 同上，15-6
- 7) 同上，16
- 8) 同上
- 9) 同上，17
- 10) 同上
- 11) 同上
- 12) 同上
- 13) 同上
- 14) 同上，17-18
- 15) 同上，18

- 16) 同上
- 17) 同上
- 18) 同上, 18-19
- 19) 同上, 19
- 20) 同上, 19-20
- 21) 同上, 20
- 22) 同上
- 23) 同上, 20-21
- 24) 同上, 21
- 25) 同上
- 26) 同上, 22
- 27) 同上
- 28) 明治 40 年全国中学校長会議報告, 教育時論, 802 号, 開成社(1907)
- 29) 竹之下休蔵, 岸野雄三『近代日本学校体育史』, 東洋館出版社, 85(1959)
- 30) 日比野寛: 運動及運動競技に関する注意, 学林, 第 68 号, 233-235 (1909)
- 31) 同上, 233
- 32) 同上, 234
- 33) 同上, 233
- 34) 同上, 234
- 35) 日比野: 中学管理談, 学林, 第 50 号, 105-123(1900)
- 36) 日比野: 運動及び競技, 学林, 第 65 号, 1-6(1907)
- 37) 日比野: 十周年学校長を為し又猶ほ現に為つつある予の抱負, 学林, 第 69 号, 1-14(1910)
- 38) 日比野: 大いに出場せよ, 学林, 第 73 号, 1-3(1911)
- 39) 日比野: 運動及運動競技に関する注意, 前掲書, 233
- 40) 同上, 234
- 41) 校医及体操科共述: 我校体育の過去及現在, 学林, 第 69 号, 51(1910)